

張 倩倩

zhangqianqian1011@gmail.com

1. はじめに

Malchukov et al. (2010: 1) の定義によると、動詞、動作主の項 (Agent argument, A)、受取手と思しき項 (Recipient-like argument, R)、移動体の項 (Theme argument, T) を同時に含む動詞を三項動詞と呼ぶ。サンスクリットにも、三項動詞による二重対格構造が存在することが知られている。サンスクリットを記述した紀元前 5 世紀頃のインドの伝統文法 *Aṣṭādhyāyī* においては、二重対格をとる三項動詞に言及した規定として P.1.4.51 が知られている (Deshpande 1991: 22-23)²。また、注釈書 *Kāśikāvṛtti* と *Siddhāntakaumudī* におけるこのスートラの解釈によると、サンスクリットにおいて二重対格をとる動詞は√duh「(乳を) 絞る」、√yāc「請う」、√pac「料理する」³、√daṇḍ「罰する」、√rudh「閉じ込める」、√prach「尋ねる」、√bhikṣ「乞う」、√ci「摘み取る」、√brū「言う」、√śās「教える」、√ji「勝ちとる」、√math「かき混ぜる」、√muṣ「盗む」、√nī「導く」、√hr「運ぶ」、√krṣ「引っ張る」、√vah「運ぶ」の 17 種類がある。

しかしながら、「導く」、「運ぶ」といった動詞よりも通言語的に二重対格になる強い傾向があるとされる「与える」という動詞 (Kittilä 2006a: 603-604) の R はサンスクリットのどの時代でも一貫して与格で表される。本発表では、サンスクリットの動詞における R の格の選択基準がどのような要素に影響されているのかを検討する。方法としては伝統文法におけるサンスクリットの三項動詞と二重対格の取れない「与える」などの動詞の格支配の起源を、まず現存最古の文献『リグ・ヴェーダ (RV, 紀元前 12 世紀頃)』に遡って調査し、これらの動詞の格支配の歴史変化を辿りつつ、R と T の有生性の非対称性 (3.1 節) と R の受益性 (3.2 節) という二つの基準を用いて説明する。

2. 三項動詞の通言語的な特徴

Haspelmath (2015: 37) によれば、通言語的に見ると三項動詞の中核となる動詞は「与える」、「見せる」、「話す」のような、R が有生物であり、T が無生物になりやすい動詞、および「送る」、「持ってくる」のような R が空間的な目標になる動詞である。本発表は前者を略して①と呼び、後者を②と呼ぶ。

①と②の分類方法に基づく、伝統文法の記述による二重対格をとる動詞は次のようにまとめることができる。

- ① に属するもの: 「～に～を言う (√brū)」、「～に～を教える (√śās)」、「～に～を請う」類 (√prach 「～に～を尋ねる」、√bhikṣ 「～に～を乞う」、√yāc 「～に～を請う」)、(誰かから何かを) 獲得する類 (√duh 「～から (乳を) 絞る」、√daṇḍ 「～に～を罰する」、√ji 「～から～を勝ちとる」、√muṣ 「～から～を盗む」、√ci 「～から～を摘み取る」);

¹ 本稿の執筆の際に、東京大学言語学研究室の大学院演習で多くのご指摘を受けました。まだ調査中で、いただいたコメントを反映できていないところもありますが、心より御礼を申し上げます。

² *Aṣṭādhyāyī* による記述があった後の時期のサンスクリットを古典サンスクリットと呼ぶ。

³ 伝統文法で√pac「料理する」について挙げられている二重対格の例は ‘taṇḍulān odanaṃ pacati 「彼は穀物をご飯に料理した」’であり、受取手は存在せず、結果状態が対格をとる例のため、本発表では検討しない。

② に属するもの：移動類 (\sqrt{ni} 「～を～に導く」、 \sqrt{hr} 「～を～に運ぶ」、 $\sqrt{krṣ}$ 「～を～に引っ張る」、 \sqrt{vah} 「～を～に運ぶ」、 \sqrt{rudh} 「～を～に閉じ込める」、 \sqrt{math} 「～を～に混ぜる」)

Haspelmath (2015: 37) は通言語的に①の動詞クラスは **neutral alignment (i.e. 二重対格構造)** を選びがちであり、②の動詞クラスは **R が斜格を選ぶ傾向がある** と述べ、その要因を次のように解釈している。

「通言語的に見られる動詞毎の **neutral alignment** への好みは頻度（頻度の高い動詞は、一般的な経済性の要求上、項のあからさまな符号化が少ないことを好むため、二重対格をとる傾向がある）で解釈できるが、ここでのより良い解釈は、「与える」、「見せる」、「話す」には、高い有生性の非対称性があるというものである：R は必ず有生物であり、T はほぼ常に無生物である。「送る」、「持ってくる」、「投げる」などの動詞では、無生物である目標的な R がより可能になりやすい。」

Haspelmath (2015: 37)

すなわち、動詞が二重対格をとるか、R が斜格をとるかは頻度と有生性の非対称性の二つの解釈が可能である。有生性の非対称性に関しては、高い有生性の非対称性がある動詞の場合、二重対格を用いても曖昧性は生じにくく、有生性の非対称性が低い場合、二重対格を用いると曖昧性が生じるため、R は与格をとることが多いという解釈である。⁴

Haspelmath の言及した二つの可能な解釈の一つである頻度について、サンスクリットにおける一部の動詞の RV. と古典期の文献 *Buddhacarita* (Bud., 紀元前 1 世紀頃)、*Hitopadeśa* (Hit., 800-900 年頃) における出現回数をコーパス⁵で調査した結果は次の表 1 のようである。なお、この三つの文献の（コーパス上の）総語数は RV. が 170904 語、Bud. が 19018 語、Hit. が 24962 語である。

表 1 RV. と古典期文献における各動詞の出現回数

	①			②						$\sqrt{dā}$
	$\sqrt{sās}$	\sqrt{prach}	$\sqrt{yāc}$	\sqrt{math}	\sqrt{vah}	\sqrt{hr}	\sqrt{ni}	$\sqrt{krṣ}$	\sqrt{rudh}	
RV.	42	52	9	16	360	8	149	10	10	352
Bud.	2	8	2	1	4	22	3	3	2	10
Hit.	7	29	2	0	7	5	24	1	0	54

この表 1 からわかるように、二重対格を取る動詞（例えば、 $\sqrt{yāc}$ 「請う」や $\sqrt{sās}$ 「教える」など）は決して R が与格をとる $\sqrt{dā}$ より出現回数が高い動詞というわけではない。したがって、サンスクリットの三項動詞の分布は、動詞の頻度では説明できないと考えられる。

次に、もう一つの説明方法として言及されている有生性の非対称性について、Whaley (1997: 173) の述べた有生性階層 (図 1) を用い、R と T の有生性がこの有生性階層でどのくらい離れているかによって判断する。R と T の有生性はこの有生性階層において、離れていれば離れているほど有生性の非対称性が高いと判断され、近ければ近いほど有生性の非対称性が低いと判断される。サンスクリットにおける R の格の選択基準の 1 つ説明方法としてこの有生性の非対称性を用いて 3.1 節で分析する。

⁴ 有生性の類似から生まれた曖昧性について、Kittilä (2006b) にも言及がある。

⁵ Digital Corpus of Sanskrit: <http://www.sanskrit-linguistics.org/dcs/index.php>.

図 1 有生性階層 (Whaley 1997: 173)

3. 分析

3.1 サンスクリットの三項動詞の格支配の起源と有生性の非対称性

本節では伝統文法の記述における古典期の三項動詞、および前述の√dā「与える」について、RV. における格表示⁶を調査した。結果は次の通りである。

表 2 RV と古典期における R の格について

	「教える(√śās)」	「請う」類 ⁷	「獲得する」類	「言う(√brū) ⁸	移動類 ⁹	√dā 類
R (RV.)	ACC	ACC	ACC	DAT/ACC	DAT	DAT
R (古典期) ¹⁰	ACC	ACC	ACC	ACC	ACC	DAT

この表で示されているように、RV.においては、「言う」と移動類の動詞については R がほぼ与格を取る。古典期と同様に対格を取るのは「教える」、「請う」類と「獲得する」類の動詞のみである。また、√dā(「与える」)は、RV.においても、紀元 5 世紀以降の古典サンスクリットと同様に R が与格を取る。

第 2 節で言及した有生性の非対称性を考えると、RV.においても有生性の非対称性の高い「教える」、「請う」類、「獲得する」類、「言う」類は二重対格を取ることができる。一方、「送る」、「持ってくる」などの移動類の動詞では、R は無生物の空間的目標になりやすく、同様に無生物になりがちな T との有生性の非対称性が低く、曖昧性を避けるために、R は与格や他の斜格をとるという解釈ができる。

しかしながら、通言語的に最も二重対格の取りやすいと言われている「与える」を意味する動詞は、R は与格しか取ることができない。これはサンスクリットにおける「与える」を意味する動詞が、他の言語の「与える」とは異なり、R が有生物になりうるのみならず、T は養子や結婚などの場面では有生物¹¹になりうる (Grassmann 1955: 587)。したがって、有生性の非対称性は「教える」、「請う」類、「獲得する」類、「言う」より相対的に低いと考えられる。RV.において、分詞を含めた√dā の現れた 352 箇所用の例のうち、33 箇所において T が有生物の例である¹²。具体的には次の例文 (1) が挙げられる。

例 (1)	ádadā	árbhām	mahaté
	give-2.IPF.SG.	small-ACC.SG.F.	great-DAT.SG.M

⁶ 調査方法：RV.におけるこれらの動詞を Digital Corpus of Sanskrit によって取り出し、格支配を判断する。なお、√dañd「罰する」は RV.において用例がない。

⁷ √bhikṣ は RV.において R はほぼ現れないため、この「請う」類の動詞は主に√prach「尋ねる」と√yāc「請う」を指す。

⁸ √brū 以外の「言う」類の動詞は、概して√brū と同様に、RV. においては R が与格か対格で表されるが、時代に下につれて対格の用法が増加する (Hopkins 1907: 374-377)。

⁹ √kṛṣ「引っ張る」と√rudh「閉じ込める」は RV.においてほぼ R が現れないため、この移動類の動詞は主に√nī「導く」、√hr「運ぶ」、√vah「運ぶ」、√math「かき混ぜる」を指す。

¹⁰ 古典期の格支配はパーニニの注釈書の記述と辞書 Monier (1899) によるものである。

¹¹ Plank (1987) によると、ドイツ語の「与える」の動詞も「嫁にもらう」のような意味があるため、有生性の非対称性が低く、与格をとる。

¹² RV.1.51.13; RV.1.91.20; RV.2.3.24; RV.5.2.1; RV.5.25.5; RV.5.25.6; RV.6.14.4; RV.10.80.1; etc.

vacasyáve	kakṣívate	vṛcayám
eloquent-DAT.SG.M	Kakṣívant-DAT.SG.M	Vṛcayá-ACC.SG.F
indra	sunvaté... (RV.1.51.13)	
Indra-VOC.SG.	soma-presser -DAT.SG.M.	

Du gabst dem alten beredten, somapressenden Kaksivat die junge Vrcaya, o Indra (Geldner 1951: 64).

この例においては、R である *Kakṣívant* が有生物である一方、T の *Vṛcayá* も同じ有生物であり、有生性の非対称性が低いため、曖昧性を防ぐために *Kakṣívant* が与格をとると考えられる。

すなわち、RV.においては、R は有生性の非対称性が高い場合には対格、低い場合には与格を取るという傾向が見られる。上述した動詞の R と T の有生性の非対称性は、以下の図 2 のようにまとめることができる。

①「教える」・「請う」類・「獲得する」類・「言う」 「与える」・②移動類の動詞

高い

低い

図 2. RV.における各動詞類における R と T の有生性の非対称性

この傾向を最もよく示す動詞が *√brū* (「言う」) である。この動詞は、RV.では R は主に与格で表されるが、R が人間特に二人称代名詞 (RV.6.56.4)、親族名詞の場合 (RV.6.55.5) のような有生性階層が上にある名詞の場合、対格を取る例も存在する。例えば、次の例 (2) である。

例 (2)	yád	adyá	tvā	puruṣṭuta
	REL.PRON.ACC.SG.	today	2.PER.PRON.ACC.SG.	much praised-VOC.SG.
	brāvāma	dasra	mantumah,	tát
	say-SBJV.1.PL.	wondrous-VOC.SG.	wise-VOC.SG.	DEM.PRON.ACC.SG.
	sú	no	mánma	sādhaya. (RV.6.56.4)
	well	1.PER.PRON.GEN.PL.	thought-ACC.SG.	succeed-CAUS.IPV.2.SG.

Pusan, geh den Rindern des Opfernden nach, der Soma preßt, und auch unseren, der Sänger! (Geldner 1951: 159).

しかしながら、古典期のサンスクリットにおいては、対格の使用範囲が拡大している。RV.では R が与格を取れる移動類の動詞や *√brū* (「言う」) も、古典期では対格をとるようになっている。*√dā* (与える) はどの時代でも一貫して与格をとっている。次節では、その理由を受益性を用いて分析する。

3.2 受益性

Aṣṭādhyāyī の P.1.4.32.において、「与える」の動詞の R は受益者 (Sampradāna) であると定義されている。また、Kittilä (2005: 274-275) は Recipient-beneficiary という概念を提起し、受取手と受益者を組み合わせたものとして用いられ、受益の可能性もあるが必須ではない Recipient と受容行為のない Beneficiary

言える。R の格選択の基準は RV.では有生性の非対称性であり、古典期では有生性の非対称性に加えて受益性にも影響されるようになったと考えられる。

4. 結論

本発表では、インドの伝統文法で挙げられている二重対格をとる動詞語幹の支配する格の通時的変化を調査した。RV.では、それらの動詞のうち、√śās「教える」等すでに二重対格をとる動詞が存在する一方、「言う」や「運ぶ」などの動詞は時代が下るにつれて二重対格をとるようになった。これらの動詞はどれも通言語的に二重対格をとりやすいとされるものである。それに反し、通言語的に最も二重対格をとりやすいとされる√dā「与える」は、例外的に一貫して R が与格、T が対格をとる。この変化に関して、本発表は R と T の有生性に関する非対称性と R の受益性という二つの指標を用いて説明した。まず、用例調査の結果、RV.では R と T の非対称性が高い場合は R が対格、低い場合は R が与格を取るという傾向があり、古典期になると R の受益性が低い場合に R が対格をとるようになり、結果として二重対格をとるようになるということがわかった。したがって、RV.の時期の二重対格の分布は R と T の有生性の非対称性、古典期に二重対格に変化するかどうかは受益性が基準となっているといえる。そして、√dā「与える」が一貫して二重対格をとらないのは、R と T の有生性の非対称性が低く、かつ R の受益性が高いからであると結論づけられる。

略語と参考文献

1: first person; 2: second person; A: Agent argument; Ā: Ātmanepada, middle voice; ABL: ablative; ACC: accusative; Bud: Buddhacarita; CAUS: causative; DAT: dative; F: feminine; GEN: genitive; Hit: Hitopadeśa; IMP: imperative; IPFV: imperfect; INS: instrument; iti-S: iti direct speech; LOC: locative; M: masculine; N: neuter; NOM: nominative case; P: Pāṇini's Aṣṭādhyāyī; PRS: present; PRON: pronoun; R: recipient-like argument; Rām: Rāmāyaṇa; RV: Rigveda; Sau: Saundarānanda; SBJV: subjunctive; SG: singular; ŚS: Atharvaveda-Saṃhitā of Śaunaka; T: theme argument; VOC: vocative case; √: root of the verb.

- Deshpande, Madhav M. (1991) Ditransitive Passive in Pāṇini. *Indo-Iranian Journal* 34, No.1:19 – 35.
- Geldner, Karl Friedrich (1951) *Der Rig-Veda: aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen, Dritter Teil*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Grassmann, Hermann (1955) *Wörterbuch zum Rigveda*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Haspelmath, Martin (2015) Ditransitive Constructions. *Annual Review of Linguistics*, 1:19 – 41.
- Hopkins, E. Washburn (1907) Aspect of the Vedic Dative. *Journal of the American Oriental Society*, 28: 360 – 406.
- Kielhorn, Franz (ed.) (1985) *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali*. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Kittilä, Seppo (2005) Recipient-prominence vs. beneficiary-prominence. *Linguistic Typology* 9 (2): 269 – 297.
- Kittilä, Seppo (2006a) The anomaly of the verb 'give' explained by its high (formal and semantic) transitivity. *Studies in language* 44 (3): 569 – 612.
- Kittilä, Seppo (2006b) The woman showed the baby to her sister: On resolving humanness-driven ambiguity in ditransitives. In Kulikov, Leonid & Malchukov, Andrej & Swart, Peter de (eds.), *Case, Valency and Transitivity*, (Studies in Language Companion Series), 291 – 309. Amsterdam: John Benjamins.
- Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) Ditransitive constructions: A typological overview. In Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (ed.) *Studies in Ditransitive Constructions* 1 – 64.
- Monier, Williams (1899) *A Sanskrit-English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*. Oxford; Tokyo: Clarendon Press.
- Plank, Frans (1987) Direkte indirekte Objekte: Was uns lehren lehrt. *Leuvense Bijdragen* 76: 37 – 61.
- Whaley, Lindsay J. (1997) *Introduction to Typology: the Unity and Diversity of Language*. Thousand Oaks, California: Sage Publications.
- Whitney, William Dwight (1905) *Atharva-veda saṃhitā - translated with a critical and exegetical commentary. Second Half*. Revised and edited by Charles Rockwell Lanman. Cambridge: Harvard University.